

---

# 日本再興

でんでん

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

日本再興

### 【Nコード】

N9834X

### 【作者名】

でんでん

### 【あらすじ】

沖繩への海軍総特攻と、日本が史実よりも早く降伏し、ある程度の軍隊保有を認められた日本の戦後、そして戦艦「長門」の話。

この小説は個人的妄想とちっぴけな知識で練り広げられています。不定期連載です。

## プロローグ

1945年7月12日、大日本帝國は連合国に無条件降伏した。

独逸の無条件降伏と、4月の沖繩死守のための海軍総特攻、沖繩の陥落により

日本が闘う力は残されていなかった。

軍部、大本営は「徹底抗戦あるのみ」と断固反対したが、天皇陛下や4月の総特攻で

大和や伊勢、日向などほとんどの主力艦を失い、そこまでの沖繩も7月2日に陥落、

燃料、資源は枯渇し、国力や国民の生活はほぼ限界だろうと考えていた海軍に押し切られた。

この話は、日本が立ち上がるために命を尽くした者たちの話である。

1945・3・30

1945年3月30日 戦艦大和会議室

「あなたは7000人も部下に無駄死にしろと言つのですか」

伊藤整一海軍中将はこう言い放った。

「何も第二艦隊だけでは言っていないません。帝国の持てる全戦力を投入します。」

草鹿参謀長はこう言った。

「具体的には？」

「戦艦は帝国のもてる全てを投入し、空母は天城、葛城、隼鷹、巡洋艦は羽黒、高雄、青葉、利根、足柄、矢矧、酒匂、その他駆逐艦は22艦を投入し、潜水艦も13艦を投入し、第32軍による総攻撃も行います。」

「燃料は足りるのですか？もしこの作戦が万が一成功したとしてもこれからの防空任務が疎かになってしまつては意味がありません。そして空母を出したとしてもマリアナのように落とされるのがオチです。」

「では、誰が沖縄を救うのですか？あそこには沢山の兵士、そして民間人がいます。それを見捨ててどうしろと？」

「だからそれでも私たちの部下を犬死することは、豊田司令長官の

命令でも許しません。」

会議室は静寂に包まれた。

三上中佐が口を開く。

「及川古志郎軍令部総長がこの作戦を天皇に上奏したとき、「航空部隊丈の総攻撃なるや」との御下問があり、陛下から「飛行機だけか？海軍にはもう船はないのか？沖繩は救えないのか？」と・・・要するに、一億総特攻のさきがけになっていたきたい、これが本作戦の眼目であります。」

「分かった。やってみよう。だが、どうやっても成功の望みがないとき、私の独断で作戦を中止し残存艦船を撤退させます。それで良いですか？」

「はい。それで良いでしょう。いざとなればこの責任は私が負います。」

草鹿参謀長が答える。

これが帝國海軍最後の水上作戦、天一号作戦の始まりだった。

1945・3・30(後書き)

感想、ご意見などあればお願いします。  
文才がないような・・・(じゃあ何で書くんのだ)

1945年4月1日 呉 戦艦伊勢艦橋

「牟田口艦長。決行日の7日までに戦艦の修理は間に合うでしょうか？」

「伊藤長官、申し訳ありませんが間に合わないと思います。戦艦の他に、一部の巡洋艦の修理も行わなければいけませんね……」

「この作戦、勝てるでしょうか？」  
牟田口艦長が問う。

「正直に言うと、この作戦に勝つのは到底不可能でしょう。よほどの偶然が起きない限りは……数、練度でも負ける我軍は、どこで勝てるのでしょうか……」

その時、通信兵が突然入ってきた。

「伊藤長官！」

「何かね？」

「ある程度の敵戦力が分かりました。空母、戦艦が15、その他補助艦艇が35前後と見られます。」

「アメさんも本気だな……第二艦隊だけで行くのは無謀だったな……」

「やはり出来るだけ多くの艦艇で行ったほうがよろしいみたいです」

ね・・・」

「今度はレイテのように撤退は許されない。貴重な巡洋艦や駆逐艦を圏に差し向けるのだから・・・」

天一号水上特攻作戦要項

第二海上特別攻撃隊、第四海上特別攻撃隊、第五海上特別攻撃隊は4月8日に沖縄に壮烈無比な突入を行い、敵機動艦隊を撃滅せよ。これは帝國陸海軍の総力を持って行われる作戦である。皇国の興廢この一戦にあり各員一層奮励努力せよ

同日 呉 戦艦大和 会議室

「痛つつつつ・・・まったくアメ公もやってくれたものだね・・・」

「そう言う黒髪ポニーテールの女子。」

もちろん海軍には女性乗組員などいない。喋るのは、戦艦伊勢の艦魂伊勢である。

「そうだね姉さん。この空襲で沈没艦も出てしまったし、大淀ちゃんとか大変そうよ?」

と答えるのは黒髪ポニーテール、伊勢に瓜二つの戦艦日向の艦魂日向。

「って集まった目的はそんな雑談会じゃないでしょ!」

「でも呉に居た艦はほとんど空襲を受けてるし・・・大和ちゃんはどうかだった?」

全員無視。さらに騒がしくなる会議室。

「被害は軽微でしたが・・・さっきから榛名さんの意見が無視され

てるような・・・」

と話す長い黒髪をした麗人、戦艦大和の艦魂大和が突っ込む。

もちろんおしゃべりは止まらない。

元々雑談会ではなく天一号作戦の会議として呉に居た艦魂をほとんど召集して行われた会議だったが、伊勢姉妹のお喋りによって完全に話題は3月の呉軍港空襲に。

騒がしくなる会議室に、すすり泣く声が・・・

赤髪のツインテールをした20歳くらい女性、戦艦榛名の艦魂榛名が泣いていた。

「なんでみんな無視するのよ・・・作者だって気遣ってくれないし・・・もう嫌だ・・・グスン・・・大和お・・・」

とって大和に抱きついてしまった。

一同驚く。そして静まり返る。

当然、一番驚いて赤面しきっていたのはやはり大和だった・・・

作者く艦魂については出すか迷っていました。結局出すことにしました。とりあえずこの話は一部人物と帝國、アメ公の艦魂くらいしか出てきませんし、ある程度進んでいくと新しい登場人物は出なくなると思います。問題は「短くてもいいからほぼ毎日連載する」か、「長いけど連載間隔が長い」かのどちらかになると思いますけど・・・自分ではこれが限界ですしね・・・

艦魂連合く・・・

作者くあの・・・なんか御用でも・・・

艦魂連合くごちゃごちゃ喋るな！要点だけ言え！

作者くすいません・・・

艦魂連合く毎回本編が短いんだよ！（特に一話）

作者くすいません・・・

艦魂連合くというかこんなお前みたいな馬鹿作者の書いた現実逃避小説なんて見る人いないんだよ！

作者くもういい・・・普通そこまで言うかよ・・・こいつら沖縄で全員沈める・・・

艦魂連合く何か言ったか？罰として戦艦群の主砲斉射！

ズーン！！

艦魂連合くいや～いい音だね～

大和く暴走しすぎましたが、ご意見ご感想お待ちしています。

1945年4月1日 呉 戦艦大和会議室内

次の作戦が特攻作戦だとは薄々分かっていました。

レイテで瑞鶴、千歳、千代田、瑞鳳を失い、戦艦も扶桑、山城、金剛、そして不沈戦艦武蔵を失った。他にも鳥海、摩耶……みんな自分の大切な仲間だった。もう日本には闘う力が残されていないことも気付いていた。

だが、それでも米英に立ち向かわなければならぬことを、彼は知っていた。

艦魂たちの会議は、平行線を辿っていた。この作戦が本当に正しいのか、私たちはここで死ぬことに意味があるのか、こんな作戦ただの無駄死にだと、そして、もしこの作戦が成功しても米英は日本を諦めるのか、と。

いつも温厚でふざけてばかりでいた伊勢姉妹までも、この作戦は正しいのか、そしてこんな作戦なんてただの無駄死だ、と……

「野方大尉。教えてください。なにぼんやりと考え事してるんですか？」

突然、声をかけられた。その声は、大和のものだった。

「ああ、何について答えればいい？ すっかり考え事をしていてな……」

「まったく、野方さんはいつもそう……この作戦についてどう思いますか？」

さつきから静まり返った会議室で榛名が言う。その話をしていたのか・・・

彼は野上 修也。戦艦大和の航海長だ。階級は大尉。つい最近大和の航海長に着任したばかりだった。そして、彼には艦魂が見えた。そして野上が重い口を開く。

「この作戦、俺はやるしかないと思う。俺たちが日本を守らずして誰が日本を守る？」

こうやって会議している間にも、米軍が上陸し、陸さんが苦しめられ、沖繩は追い詰められている。沖繩が落ちたら、次は本土だ。俺たちは、闘わずして死ぬか、闘って死ぬか。

それしか選択肢が残されていないんだよ。」  
静まり返っていた会議室が騒ぎ出した。

「ですが、本土防空や輸送まで完全に放棄して、ただでさえ少ない燃料をこんな作戦につき込むのなら、他に使い道があるんじゃないのかと私は思います。」

それにこの作戦は、私たちに死に行けと言っているのと同じようなことです！

少ない戦力で量、錬度に勝る米英に立ち向かうなど・・・  
沖繩は諦め、本土決戦に持ち込むのが良いと私は考えます。」

巡洋艦利根の艦魂、利根が言う。

「そうだ！」「こんなの無駄死だ！」という声が聞こえる。

そして野上が反論する。

「この作戦を伊藤中将が承諾したとき、三上中佐がなんと言ったか知っているか？」

陛下から「飛行機だけか？海軍にはもう船はないのか？沖繩は救え

ないのか？」と聞かれたそうだ・・・要するに、一億総特攻の先駆けになってもらう。これが本作戦の眼目だとな。

それに、かつて俺の一番尊敬する人がこう言っていたよ。

「俺たちが、軍が不甲斐無いばかりに、力がないばかりに、俺たちが守らなければいけない国民が、傷ついて死んでいくんだよ。俺たちのせいで、警沢も娯楽もできず、我慢を強いられているのにだよ。犠牲になるのは、何の罪もない国民なんだ・・・」とな・・・

ここで何も出来なければ、また罪のない国民が犠牲になる！俺の母さんだって東京大空襲で死んだ！ここで何も出来なければ・・・」

会議室は騒がしくなっていく。野上が大和に聞いた。

「大和、作戦決行はいつだ？」

「あつ、はい・・・出港が4月7日、沖縄に突入するのが4月8日です・・・」

「そうか・・・じゃあ、言うておく・・・別れは一応済ませておけ・・・もし沖縄で死んでも、後悔がない様にな・・・じゃあ、出港時に、各自自分の覚悟と決意を持って来るように。話は以上だ。これで大丈夫か？」

「では少し艦橋に行かなければいけないから・・・それじゃあ。」  
「といって野上は会議室を出た。」

「ねえ日向・・・私は・・・私は武蔵や、扶桑姉さんや、愛宕の仇を取る。だから、絶対に・・・勝ってみせる！」  
伊勢が言う。

「姉さん・・・アム公に思い知らせてやりましょうか。日本は負けないって。日本は勝ってみせるって。」  
「そう日向が答えた。」

天一号作戦・・・第二次世界大戦最後の海戦。

だがそれは、日本にとって帰還することを考えない、悲惨な特攻作戦だった。

それでも艦魂たち、乗組員たちは、それぞれの大切なものを守るために立ち向かう。

作者く野上さん出てきましたよ。

野上くどうも。

作者くたしか史実でも大和は出撃に半月前に航海長が変わっているんですよ！。

野上くこれも史実に合わせたのですか？（史実では茂木航海長、前任は戦艦榛名）

作者くそうですね。ちなみに野上さんの前歴は長門の航海士です。

長門とも面識があることになります。

野上くところで呉などの機雷封鎖は行われていないのですね。

作者くやられたら話しになりませんよ・・・燃料とかの事情とかも

そこらへんご都合主義になってます・・・

あと戦闘パートはかなり先ですね・・・少しずつ書いていますし、アメリカ側も書かなければいけませんしね。

艦魂連合く早く終わらせろやボケ

長門く私の出番はマダ？もう本当待ちきれないから主砲打つわ

作者くやめてくださ・・・

ズドン！！

野上くご意見ご感想お待ちしております・・・

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n9834x/>

---

日本再興

2011年10月30日03時13分発行